地球　第三卷　第四號　大正十四年四月

朝鮮の人口と其の分布

（第九版　朝鮮人口分布圖附）

中村新太郎

朝鮮に於ける人文は單純であつて解釋し易い。併合以來各種の統計の完備されたものが引續き公にされ、且つ朝鮮人の生活に關する實狀も明にされたのであるから、人文地理學的の攻究には甚だ好都合になつた。人文の複雜な內地に就いて研究する前に、單純ではあるが我が國民にとつては至大の關係と責任とのある朝鮮の人文を闡明することは筆者の如き人文地理學に興味を有つては居るものゝ、其の蘊奧を極めることの出來ぬ者に執り恰好の研究題目になる土地である。

人文地理從つて社會現象の基礎の材料となるものは人口問題である。國民の將來を眞摯に考へる人士は第一に人口の消長を察せねばならぬ、國內の開發を企圖せんには人口の分布を第一に考慮せねばならぬ、生業の趨向を洞察せんとせば住民移動の狀態を知ることを要する。之等は人口問題の一端を擧げたに過ぎないが其の思想や精神や物質以外の問題に對する關係も重大であることは讀者

の省察に委かせる。

本篇は第九版として掲げた朝鮮人口分布圖の概略の說明を主眼とする。朝鮮人口の過去の消長、近時に於ける人口の地理的動靜に就いては充分に論ずべき材料を有たぬことを遺憾とする。

朝鮮の人口は西洋人の各種の記事を綜合すれば十八世紀の後半より十九世紀中頃までは七百萬內外であつた樣で、千八百八十三年（明治十六年）には一千五十二萬を數へたが爾來明治四十年頃迄は一千萬內外を持續して殆んど不動の狀態にあつた。是李朝末期の惡政の結果として國民の增加を阻害したるに因るのであらう。爾來人口の增加は著しくて併合の年（明治四十三年）の十二月末には千三百十二萬餘を數へ大正十二年末には現住朝鮮人の數千七百四十四萬六千九百十三人に達し、この十三年間に四百三十一萬餘人の增加を見た。然し統計上に現はれた明治四十三年末より大正二年末に至る人口の增加は違常で每年の增加は人口千人に對し四十二人餘より五十五人餘に達した。こは人口計量の誤なきを保せざる狀況を示すものであるから茲に大正二年末の朝鮮人數（千五百十六萬九千九百二十三人）を大正十二年末の統計に比較すると此の十年間に於ける人口の增加は二百二十七萬六千九百九十人で、猶ほ十年間の增加率は十五％に達する。此の增加率は今後にも大體適用することが出來ると思はれるから、大正十二年後十年卽ち大正二十二年末には今日の人口千七百四十四萬餘の一割五分卽ち二百六十一萬餘を增加して朝鮮人の人口は二千萬を突破するであらう。猶ほ

朝鮮統治の餘澤は一層人口の增加率を高めて此の數に到達するのは實際に於ては數年を早め恐く大正二十年には朝鮮人は二千萬を數へることゝ信ずる。

現在に於てさへ人口から云へば朝鮮を統治することはスウェデン、ノールウェー兩王國の二倍を管するのに同じい、況んや十年後に於ては二千萬の風俗習慣を異にする一大民族を指導するのであるから日本の識者は充分な覺悟と準備とを要意せねばならないと感ずる。

次に本題である人口の分布について述べて見たい、第九版朝鮮人口分布圖は大正九年十月一日の臨時戸口調査の結果を小內田通敏氏が人口分布を郡別にして圖示したもの（朝鮮部落豫察報告第一冊所載朝鮮郡別人口密度圖（地球第一卷一九四頁新刊紹介參照）を地形に據り稍變へて大體に於て層形圖（シヒテンカルト）の樣式を具へさしたものである。此の人口密度の分布は大正十二年末に於ける人口の分布に對しても適合してゐる、是れこの約三箇年間の分布の變化は大方一から十までに別けた人口の密度區分の範圍內に這入つて了ふからである。

朝鮮に於ける住民の分布は一に其の主要な生業が農業であるといふことに基づいて、後に述べる樣に都市に集中されて居らず、どちらかといふと一樣に散布されて居る。咸南、咸北の一部を除けば數里の間人家を見ないといふ樣な處はなく、よもやと思ふ谷の中、高い山の緩斜地に寂しく立つ人家を見出すのである。然し之が分布を示すと圖版の如くで、かなり興味のある分布を作して居る

のである。圖版に示された樣に人口密度は南西に大に、北東に小にして、人口分布から云ふと日本海沿岸は裏朝鮮であり、黃海より南方朝鮮海沿岸は表朝鮮である。

猶ほ少しく分布圖を凝視すると人口の分布が地勢に制せられて居るのが明かに看取される。卽ち北部朝鮮の蓋馬山地と脊梁山脈地方とは人口が稀薄であつて、平野の多き地に人口が多いことである。特に著しく人口分布の狀態がよく地形と一致して居るのは咸南に於ける甲山（カプサン）長津高原と其の南方の沿岸地方との對照である。沿岸の平地地方に於て一方里一千人以上一千五百人以下の狹帶を見るが北方は急に五百—三百人及三百—百人の二段を超えて高原上では三百—百人の稀薄區に這入つて居ることである。この狀態はよく甲山長津高原の南緣が千米の高距の差を以て南方に急斜して居るのに一致する。

本分布圖で見え得る最も著しい一事實は北東の沿海地方の一部に一方里千人以上の密度を有する狹帶はあるにしても之を除くと、朝鮮は次の一線を以て北東の人口稀薄區と南西の人口濃密區とに兩分することが出來ることである。此の線は北西鴨綠江畔の義州と朔州との郡界から起つて蓋馬山地の西緣を南東に向ひ淸川江の河谷に沿うて、東に入り込み、次で平南及黃海兩道の中山性の山地と西方の平坦部との間を劃して西方に少しく膨れながら南東行し、之より略京畿江原の道界に沿うて猶ほ南東行を續ける。江原道の西部ではたゝ鐵原、原州の二郡が濃密部に入り、京畿道の東部で

は加平郡のみが稀薄部に這入つて居る。兩部の界は之より江原道界の少しく南方を走つて忠北では北東極の丹陽郡のみを、慶北では最北の奉化、英陽の二郡を稀薄部中に入れて遂に江原慶北の道界で日本海に達する。而して日本海の火山島鬱陵島は慶北に屬するが位置は北東に偏して稀薄部に屬する。

此の凹凸はあるが略北西より南東に亙る一線で朝鮮を兩分すると人口濃密部と稀薄部との各の面積は略同じく、稀薄部は稍大きい。朝鮮の大正十二年末に於ける總人口、密度並に稀薄、濃密兩部の面積、人口及密度を擧げると次の如くになる。(人口數は大正十二年朝鮮總督府統計年表第一編に據り面積は朝鮮地誌資料に據り濃薄兩部の數字は筆者の計算したものである)。

朝鮮總人口	一七、八八四、九六三人		
內朝鮮人	一七、四四六、九一三人		
內地人	四〇三、〇一一人		
外國人	三五、〇三九人		
(內支那人)	三三、六五四人		
一方里の平均人口	一、二四九人・六		

	(一)稀薄部	(二)濃密部
面積	七、三二九方里・四八九	六、九八二方里・五〇七
人口	四、〇九八、三〇八人	一三、七八六、六五五人
一方里の平均人口	五五九人・二	一、九七四人・五

見るべし、濃薄兩部の面積は略同じであるが、濃密部は稀薄部の三倍餘の人口を有し其の密度の割合は三・五と一となる。言ひ換へると南西部は北東部に比して三倍半の人口密度を有する。朝鮮の外廓は兎の立ちて西面するものに譬へられるが口より喉、前足を經て腹部、臀部及後脚に於て人口に富み、主要都市の密集局部を除けば其の腹部に該る全北の平野に於て最大の密度に達してゐる。もし夫れ頭部、顏部、耳部及背部の如きは盡く稀薄部を成して居るのを見る。

朝鮮が如何なる部分に於てよく開發され居るかは上述の人口に於ける兩部の位置で明かにされ得る。人口の濃密は愈々文化の度を進めさすものであるから西面は此れ以上に濃密の度を加へゆくであらうが之と共に稀薄部の開發は甚だ重要な事業であらねばならぬ。

人口分布圖を仔細に窺ふ時は局部局部の密度からして興味ある人文地理學上の問題を釋明さしてゆくが、何と云つても朝鮮人口の分布の基調をなすものは農業である。全北の平野が極大の密度を有することは此の地方が最大の米産地であることを示し、咸南咸北の高原地に米を産せざるは其の人口の稀少なる原因を作つて居る。實際朝鮮に於ける農業者の人口は總人口の八割餘に達し大正十二年末に於て千四百三十七萬三千六百四十六人を計上された。

稀薄部では咸南の沿岸が漁業の爲めに比較的密度の高いことや小京城（チャグンソール）と昔から云はれてゐる江原道江陵の沿海平地に稍人口の多いなどは面白いことである。濃密部に於ける人口の分布はかなり複

雜であるが一般に平野卽ち米産地に密にして山地に少なく、之に加ふるに島嶼狀を成して厚薄の部分が點在して居る。南鮮に就て云へば全北の鎭安長水高原に於て一方里千五百人以下に下つて居り、其の西緣の急斜地は急に人口を增して全北平野の濃密地方に臨んで居るのは前述した甲山長津高原に於けると其の趣を一にして居るのは著しいことである。大邱附近の富んだ人口が大邱を圍繞して居るのは四周が低い邱陵地で地勢によつて人口の分布が支配されることが少ないのに依るのであらう。此の外賢明に此の分布圖を讀む識者には多大の暗示と興味とを供するであらう。

最後に朝鮮の都市の人口に就いて一言したい。朝鮮には都市が內地の樣に多くない。京城は二十八萬八千餘の人口を有すが他に十萬に達する都市はない、京城も加へて二萬以上のものは十一箇所に過ぎず、一萬以上二萬以下のもの十五箇所である。之等二十五の大集落地の人口を合すれば僅に九十五萬九千五百三十七人で之を此等都市以外の人口に比すると一と一七・六との比になる。內地に於て大正十三年十月一日推計の市部人口(一一、八一二、二〇〇)と郡部人口(四七、三二六、七〇〇)とを比すると一と四との比になる。卽ち朝鮮では未だ都會集中が著しくなく總人口の九割五分は田舍にあり、內地では其の八割が田舍に住むで居るのである。朝鮮總督府統計年表に揭げてある主要市街地は三百二十三箇所の多きに達しては居るが其の多くは郡廳所在地であつて人口二千乃至四千のもの最も多く、且千人以下の集落にして郡廳あるが爲めか又は交通上主要なるが爲めに列擧され

てをるものも少くない。之等集落の多くは地方の農業又は稀に水産業の小中心となつて居る處であるから都市とは考へ得られない。唯大田(人口七、〇一四)の如き交通の衝に當つて居つてやがては人口一萬以上に達すべき處だとか、公州や淸州の如く道廳所在地ではあるが人口九千に達しない爲めに茲に都市の部に加へなかつた處だとかは後來都會集中の目的地となるべきものである。

上述の如く現在に於ては都會集中が行はれて居らずよく農業國たる有樣を現はしては居るものゝ人口の增加及文化の進步に從ひ或る程度までは都會集中が行はれるであらうから、常にこの集中の狀態を明にして其の速度或はありとすれば其の極度を考察する必要があると考へられる。

茲に注意すべきは朝鮮では聚落の成立又は移轉がかなり易く行はれ得ることである。筆者は大同江の南支南江に沿うた平南中和郡破色の部落が洪涵地にあつたが爲に一昨年の洪水により損害を受けて其の後下流約八町の段階地上に移り新しき小市街地を、我々の用ひて居る五萬分一地形圖には白く殘された畑地の上に建てられたのを昨秋目擊した。又忠南論山郡の西境なる鷄流山下には新都が建つといふ昔からの迷信から最近數年間に三百餘戸の移住民が朝鮮各道から集まつたといふことである。此の外金鑛地などが新しく開發されると倏ちにして數百戸の人家が建てられ數千の人間が文字通りに蝟集することは嘗て西鮮地方で數度目擊した所である。かゝる移動し易き民族であるから一局部の都市的集中に對してはそれが一時的のものであるか、又はある特種の原因によつて然るの

であるかを考察した上で其の事實を解釋することを要する。各道に於ける人口の增減についてたゞ統計に示された所によつて論議すると誤つた原因を信じて了ふ虞れがある。

予は本篇に添へた人口分布圖を地理學愛好者の淸覽に供へると共に朝鮮に於ける人口に關する各種の現象を闡明することは我等の深甚の顧慮を要する一大問題であることを注意する。此の一小篇が朝鮮人口問題を解釋する鍵鑰の一端となれば幸である。

○日本近海の深さの圖

我々は從來日本四近の海底の深さを眞實に且明瞭に現はした圖を持たなかつた。然るに水路部の近時の活躍に伴はれて茲に手頃の一般國民の容易に持つことの出來る圖を穫た。それは本年三月の水路要報に揭げられた海軍技師小倉仲吉學士の海深圖である。圖の範圍は北緯十五度より同五十五度に達し東經百十七度より同百五十八度に亙るもので日本の全領土を包含してゐる。この深度圖の材料は大正十三年十二月までの日本の凡てのものに加へて諸外國の錘測を採用したものである。且添ふるに小倉技師の「日本近海の深さに就いて」と云ふ論文がある。この論文は未完であるが其說明によつて日本近海の海底の起伏や諸列島の地理學上の位置やが明にされてをる。吾人はこの圖によつて新しい地理や、新しい地體構造論を考察し得ると考へる。何れ本論文完結の上は之を地球誌上に摘載し、且近海の同深線を作る場合には地上の地質構造によつて其の形を意義ある樣に描くことが必要であるといふことなどを述べて見たいと思ふ。今は取りあえず最良の日本近海深度圖の新刊を報導する。（水路要報は水路部の月刊誌で日本郵船會社で發賣する。一部貳拾錢で郵稅四錢である）（深淵生）